

第181回 番組審議会

1. 日 時 平成21年4月8日(水) 12:00～
2. 場 所 メトロポリタン盛岡NEW WING 3F「星雲東の間」
3. 委 員 委員総数 13名
出席委員数 11名(欠席委員数 2名)

○ 出席委員(敬称略)

椎井 一意(副委員長)

—以下50音順—

久慈 浩介

斎藤 純

斎藤 雅博

東海林 千秋

菅原 正二

中川 真

中原 祥皓

村上 幸子

八木橋 伸之

役重 真喜子

○会社側出席者(7名)

内海 幸司(代表取締役社長)

佐藤 滋樹(常務取締役)

小原 忍(常務取締役)

藤澤 利憲(常務取締役)

前田 秀男(取締役技術局長)

一戸 俊行(報道局 局長)

井上 智晶(報道局 報道部)

○事務局 村田 重昭

4. 議 題 「第8回春高バレーコーチングキャラバン 絆強くあれ 心強くあれ」

平成21年3月1日（日） 13:55～14:50放送

5. 議 事 概 要

今回は、「第8回春高バレーコーチングキャラバン 絆強くあれ 心強くあれ」について審議した。

各委員からは「コーチや選手たちのアップの映像が多かったにも関わらず、カメラを意識した様子があまり見られなかったため、とても映像に迫力があつた。」「コーチの『プレーに気持ちがこもっていない』といった厳しい言葉と、選手の成長ぶりが、心に残った。」「コーチの言葉である『本気になること』『必死になること』の大切さを痛感した。」「仲間を思いやる団体スポーツの良さを再確認した。」などの意見が出た。

また「古豪と言われるチームの歴史と現状の解説が、もう少し多いと分かりやすかった。」「練習のシーンがメインになるのは理解できるが、ホッとするような他のカットも入れて欲しかった。」との意見があつた。

6. 議 事

○事 務 局

ただいまより第181回番組審議会を開催いたします。

それでは、議題に入らせていただきます。今回の議題は「第8回春高バレーコーチングキャラバン 絆強くあれ 心強くあれ」です。本日は、プロデューサーの一戸報道局長とディレクターの井上報道部員が出席しております。

それでは、椎井副委員長、よろしくお願いいたします。

○椎井副委員長

それでは、一戸さん、井上さんから、番組の背景や感想などについて説明をお願いいたします。

○一戸プロデューサー

番組のプロデューサーを担当しました報道部の一戸です。本日はよろしくお願いいたします。

す。

春高バレーコーチングキャラバンは今回で8回目になります。この番組はいつもプロデュースしている番組と違って、荒んだニュースが多いなか、わくわくした気持ちで、自分も高校性時代に戻ったような、純粋な気持ちで取り組める番組です。

過去8回の番組のうち、5回この番組に関わっていますが、過去4回全て決勝のフルセットで敗れており、大変縁起の悪いプロデューサーと呼ばれています。今年のコーチングキャラバンは高田高校でした。新人戦で優勝したということもあり、非常に大きな期待をしていました。しかし残念ながら準決勝で今大会優勝高の盛岡女子との対戦になり、フルセットの末に敗れてしまいました。今回も自分のせいかな？とつい思ってしまう残念な結果でした。

番組制作は入社6年目のアナウンサー、井上が担当しました。番組制作は今回が初めてです。例年ですと井上は春高バレー男子の試合で実況を担当しています。番組を担当することで、ひとつのチームを追って取材することになりますので、この経験が今後のバレーの実況に生かされれば良いな、と思い制作を任せました。何分初めてということで、本人はとまどいも多かったようですが、仲間の報道部員が有益なアドバイスをしてくれました。そういった多くの報道部員の協力によって放送に漕ぎ着けられたものと思います。

コーチに関してですが、他の地区では、担当するコーチの取り組みの姿勢等に問題がある例もあったと聞いております。今まで岩手を担当されたコーチは、皆素晴らしい方々だったと思います。特に今回の山下コーチほどバレーを心から愛している方はいらっしゃらないのではないかな、と感じました。そういった意味で本当に恵まれておりましたし、山下コーチ良い部分が番組で表現できていれば良いな、と思っています。

今日は皆さんにいろいろなご意見を伺い、今後の番組作りに活かしていきたいと思いますので、よろしく願いいたします。

○井上ディレクター

今回、番組を初めて担当させていただきました井上と申します。

まず番組を制作して思ったことは、このコチキャラ（コーチングキャラバン）は、勿論選手たちにとってのコチキャラでもあったのですが、私にとってのコチキャラでもあったということでした。といいますのは、それほど山下コーチの「言葉」が自分にもあてはまるな、と感じられたからでした。

それはどんな「言葉」だったかと言いますと、「どうしたいのか？自分の意思を表せ。」「気

持ちを出せ。」という言葉です。高田高校は実力はあるのですが、どこか淡々としていて「試合で勝ちたい。」という気持ちが感じられませんでした。恐らく今の若い子というのは、普段から自分の気持ちを出すことに慣れていないせいだと思いますが、山下コーチがしきりにそういうふうな「気持ち」を選手たちに伝えても伝わらない、という様子でした。

そんな選手たちが変わったのが大会2週間前の福島遠征です。そのとき、山下コーチはこれまで抑えていた感情の全てを選手にぶつけました。そのときの映像は迫力があって、すごく力がある映像だったと思います。これほど本気になってくれる人はいないのではないかと、いうことを、選手たちも感じたのではないかと思います。

山下コーチは今回10日間しか実際の指導は出来なかったのですが、それでも選手と山下コーチの間にはとても深い信頼関係が生まれていたな、という感じを受けました。自分の意思を持つこととか、他人を思いやってコミュニケーションを取るということは、決してバレーボールだけではなく、社会人の私たちにとってもあてはまるものだな、と思いました。

そういうわけで、今回の番組では「ひとつのことに一生懸命になって、必死に頑張ること。」「自分のしたいことを表現すること。」そして「人とのつながりを大切にすること。」を番組を通して伝えたいと思って創りました。

今後の番組作り、自分の成長のためにも、本日は忌憚のないご意見をどうぞよろしくお願い致します。

○椎井副委員長

井上さん、ありがとうございました。それでは委員の皆様から順番にご意見を伺いたと思います。今日は最初に役重委員からお願いいたします。

○役重委員

実は私事になりますが、長男がきのう中学校の入学式でして、初めて制服を着て中学校に通い始めました。たまたまきのう、ぎりぎりになってこの番組をビデオで見たのですが、その息子も一緒に見ておりました。いつもですと飽きて途中でいなくなるのですが、きのうは最後まで黙って番組を見ておりました。かなりびびったようです。(笑)これから中学校で、部活動を選ぶという時期になるのですが、「ぼく、バレーはやめた。」と言っておりました。

(爆笑)それは決して番組のせいではなくて、本人の性格によるものとは思いますが、それくらいインパクトがあるな、と思いました。

井上ディレクターも仰っていましたが、迫力ある絵が撮れましたね。それが一番だったと思います。山下コーチが、ずーっと選手に感情をぶつけて行って、最後に「こんなチーム嫌い」と言いましたよね。あれは、指導としてどうだったか？ということとは別にして、番組としてあの映像が撮れたということが凄いことだと思いました。夫婦喧嘩でもそうなのですが、最初は理屈らしきことを言い合っている、最後に本当の感情のところになると、「バカ！バカ！」とか「嫌い！」しか出なくなってしまうよね。そういうところまでいったんだな、という山下コーチの人間のむき出しの部分まで撮れたということ、恐らくカメラが向いているという意識もなかったと思いますが、そういった迫力というものが素晴らしいかな、と思います。

井上ディレクターが仰った、子供達が変わったという福島の遠征から、たしかに本気、必死という部分が画面の中からも見えてきた部分があったと思います。

惜しいな、と思ったのはコーチのあの「むき出し・迫力・本気・必死」の部分をもとに受けて、どこかで子供のギアが入ったところがあったと思うのですが、そこでどう受け止めてどう変わったのか？子供の言葉で聞けなかったことです。その最初の一歩の部分で、子供が言葉を表に出してくれれば、それを拾えるのですが、そこまでいかなかったのかな？と思いました。

たしかに絵として子供は変わっていました。でも、たまたま変わったところだけの絵をつないだだけではないのか？と見る人は見るかもしれません。コーチの気持ちを受け止めて変わった側が、どこから這い上がろうと思ったのか？子供の言葉で聞ければなお良かった、と思いました。

8回目の番組とのことですが、私は2回くらい番組審議会で見たとと思います。前回の番組と比べると、今回は練習とコートの中のみという気がしました。あえてそれのみとしたのかな、と思いましたし、きっとそれ以外に膨大なVTRが他にある中でそのような編集になったのかな、とは思いました。

あまりやると、あざとくなるのかな、とは思いますが、自宅での普通の高校生としての様子はどうなのかな、とか、クラスの友達とのことや、普通の女の子の高校生がやっていることの多くのことを犠牲にしてバレーをやっている、という裏腹というか切なさの部分もチラッとみえると、思い入れの部分が違うのかな、と思いました。

今回は大会の日にとまたまコーチがいないという、番組を制作する側からすると非常に痛いことだっただろうな、とは思いましたが、そこを良くカバーして、両方の現場にカメラを出

してリアルタイムに繋いで、良く工夫されているな、と思いました。

非常に爽やかな番組を見せていただき、新年度早々のエネルギーをいただき、ありがとうございました。

○椎井副委員長

ありがとうございました。それでは、次に中川委員からお願いいたします。

○中川委員

産経新聞社も毎年「春高バレー」を、めんこいテレビさんと一緒にやらさせていただいています。そういう訳で私も県大会の会場で、一戸局長と一緒に3日間観戦しておりました。井上さんがカメラマンの人と一緒に、会場で選手たちのプレーを追いかけているところを見ながらの3日間でしたので、非常に感慨深い番組でした。

今までのお話にありましたように、ある程度の水準に達している選手達を、メンタルな部分でさらに上まで引き上げていくという事が、本当に大変なことなのだな、というのが実感です。

1 時間番組でちょっと長いのですが、最初は揺るやかな感じでやりとりが続いて、それがだんだん山下コーチの感情とともに高まってきて、流れの勢いの変化に引き込まれて、涙を流してしまうような感動がありました。私もとても良い番組だったと思います。

役重委員が先ほど仰られたように、選手がどこで変わっていくのか？というところがもう少し出てくる場面あれば良かったと私も思いました。

○椎井副委員長

ありがとうございました。それでは、次に齋藤純委員からお願いいたします。

○齋藤純委員

春高バレーのシリーズは、何回か見ております。毎年その都度もうそんな季節か？と思いますが、ことのほか今年は1年が早く感じられ、年齢を重ねるということはそういうことなのか、としみじみ思いました。

今回の番組で面白かったのは、コーチの言葉です。「気持ちがかもっていない」「想いがこもっていない」そのことをすごく言っていたことでした。それはチームのメンバー同士で「気

持ち伝える」「想いを伝える」ということもあるのですが、最後の方になってから、選手の「気持ちや想い」を試合を見ているほうの人にも伝える、という意味のことがありました。これはバレーボール以外のことでも、音楽でも小説でも、何かものを作る人には皆に言えることだと思います。

最近は特に、これをやればいくら儲かるな、というようなお金に換算して、これを付け足そう、あれをやろう、そういう発想がはびこっているように思いますが、こういう純粋なもので「人の心を動かす」ということが再確認できた番組でした。

この番組は一部の若い人には、バレーだけはやりたくない、という影響があったかもしれませんが、バレーに興味のない私でも大いに楽しめる良い番組だったと思います。本当に番組中盤からは、手に汗握って見ておりました。

ひとつ不思議に思ったのは、コーチや選手たちはテレビカメラが入っているということ、意識しないものなのではないでしょうか？全然普段どおりにやっているな、と思って見ておりました。テレビカメラが入ることが練習の邪魔になることはないのでしょうか？その辺をお聞きしたいなと思いました。

あと見ていて非常に思ったことは「本気になる」ということの大切さでした。自分は最近本気になったことがあるだろうか？と反省を強いられました。終わります。

○井上ディレクター

今のご質問ですが、選手たちは無茶苦茶カメラを意識していました。最初の頃は特にそうでしたし、今でもカメラを向けると「カメラを向けないで」と彼女たちは言います。それは普段の柔らかい場面でのことですが、練習に入ると、山下コーチはまったくカメラを意識していませんし、選手たちもそれにつられて練習に集中するので、その間はカメラを意識していなかったな、というふうに思います。

でも、インタビューをしようとする「5メートル以上離れてください。」などと言われるくらいでしたから、やはりかなりカメラを意識していたと思います。

○椎井副委員長

ありがとうございました。齋藤委員、これでよろしいですね？

それでは続きまして菅原委員からお願いいたします。

○菅原委員

今回もまた思ったのですが、女の子というのはすぐ泣くな、ということです。(笑) どうしてすぐ泣くのだろうと思って見ていました。

委員の皆さんが今まで仰ったことはすごく良く分かるのですが、番組制作上サービス精神が足りないな、と思いました。具体的に言うと、陸前高田と言ったら、高田湾の高田松原を2秒でいいから映すべきだと思います。高田だろろうが一関だろろうが体育館の中であれば、どこに行っても同じ場面に見えるのですから、映像上のサービス精神が非常に欠けるな、と思いました。

コーチが車を運転して陸前高田に向かう場面がありました。非常にきれいな景色のところで車内を撮っていました。2秒のカットでもいいので、外のきれいな映像も何らかの方法で撮影して見せて欲しいと思います。そうすることで非常に番組の密度が濃くなります。どこかの町に取材で行ったら、大局的に捉えるという意味で、外から見た映像を入れるべきだと思います。テレビというものは映像で表現するものですから、いくら厳しいいじめや泣かせで迫ったところで、見ているほうは、どこかでほっとするような外の景色も見たいものではないでしょうか？

私は、体育会系のいじめて、泣かせて、感動させて、というのはあまり好きではありません。そういうことは分かっています。(笑) ちょっとした映像のサービスを入れないと、楽しく見てもらえないのではないのでしょうか？体育館の映像だけではやはり限界があるように思えます。今後はそういったことも考えてはどうか？と思います。

番組を制作されている一戸さんやスタッフの皆さんは本気になっていますから、それだけを追おうとするので、あんなっちゃいますが、見ているほうは、それほど入れ込んで見ていませんので、どこかでちょっとでもサービスのカットがあってもいいと思います。

番組では、県大会で優勝も狙えるチーム、ということでしたが、私にはそういうチームには見えませんでした。それほどのチームではないことは、画面から歴然と伝わってきます。この番組ではいつも残念な結果で終わるのですが、ちょっとした画面を入れて番組の密度を濃くしたほうが良いと思います。

あとは皆さん仰っていることと大体同じことを感じています。何をやるにしても真剣に取り組む、ということは、私も同じです。

見終わって良い番組だった、ということで終わるよりも、今後のことを考えた場合は、目を転じて外に向けてみる、ということがあったほうが良いように、私は思いました。

○椎井副委員長

ありがとうございました。続きまして八木橋委員からお願いいたします。

○八木橋委員

春高バレーは、過去にもう何度か取り上げられていて、そのたびに番組審議会として意見を言ってきたわけですが、今回の番組はその意見を忠実に取り入れた番組だったように思います。

私が審議会に過去出席して記憶している範囲では、今までは「コーチと選手のやり取りに絞って、そこを集中的にやれ。」という意見がだいぶ出ていました。今回の番組を見てみると、その意見を忠実に取り入れたなと思います。私はそういう意味では極めて良くできているなと、そう思いました。委員の皆さんの多数の意見を取り入れ、一種の完成型に近い番組になったな、と思っています。

以前も選手とコーチのやり取りに絞って、応援団の姿とか校長先生の挨拶とか、そういうものは邪魔だから入れないで欲しい、と言った委員の方は多かったように思います。

今回もコーチが「全校で応援にきてくれるぞ。」と一言言って、全校の応援団の様子を何秒かサーッと流してコメントは入れない、という作りで、良く忠実に過去の委員の意見を守っているな、非常にいいな、ひとつの完成型だな、と私はそう思って番組を見ていました。

菅原委員が仰ったように、町の様子とかそういったカットをサービスで2秒くらい入れても良いとは思いますが、作り方としては前に述べたように、非常に良かったな、と思っています。

これからも多分この番組は続くのでしょうから、過去の流れから全体的にこの番組を見てもみますと、選手とコーチのやり取りに絞る作り方をすると、結局選手とコーチの人柄が非常に大きな意味合いを持ってくると思います。コーチの人選が良かった、という話もありましたが、今までのコーチと比べるとどうだとか、今までの選手と比べると反応はどうだとか、選手とコーチの部分に話しを集中すると、そういったことが大きく響いてくると思います。

今回の番組は、長い時間で見飽きた、という感じは決してしませんでした。菅原委員が仰ったように、客観的な意味で、どのレベルのチームが、コーチをしてもらったおかげで、どういったレベルまで上がったのか？ということを知りたいと思いました。今までの春高バレーの番組で取り上げられたチームは、大概負けていますが、そういう意味でそれが惜敗だ

ったのか、順当な敗北だったのか？優勝を狙えるチームがどこかでミスをして負けたのか？
というようなことです。番組としてそういったことを言えるかどうかは難しいかもしれませんが、過去にコーチがチームの敗因の分析をしたことがありました。そういうものがあつた
ほうが、将来のためには良いと思います。

最後にコーチが選手たちに言葉をかけたときに「これで終わりではない」と言っていました
が、その意味が良くわかりませんでした。新人戦で勝って、本大会で負けたから来年は頑
張ろう、ということなのか？秋の大会で頑張れという趣旨なのか？それとも人生頑張れとい
う意味で言ったのか？「これで終わりではない」という言葉はいい言葉だと思いますが、そ
の意味がちょっとわかりませんでした。バレーを続けてやれ、という趣旨の「これで終わり
ではない」であれば、厳しいコーチの敗因分析が一言二言あつても良いと思います。

コーチと選手のやり取りに絞って番組を作るのであれば、試合で対戦するそれぞれのチー
ムのデータをテロップで紹介したり、ナレーションで説明するなりして、チームの力関係を
説明したり、さらに敗因分析をちょっと入れるなりしてもらえれば、それでより良い番組に
なると思います。

個別的なことでは、番組ではいろいろな言葉が出ていました。私も山下コーチの言葉
の中に、気に入った言葉が随分あつて拾ってみたのですが、その中に「次の人が手助けした
くなるようなプレーをしろ」というのがあつて、なるほどと思いましたし、最後にコーチが
来て選手に言った言葉の中に、「弱さを知って強くなれ」というのもありました。全編に渡っ
て良い言葉がちりばめられていて、良いことだと思いましたし、今後もそういった良い言葉
は捨てないで、丹念に拾ってもらえれば良い番組になるのではないかと思います。

いずれにせよ「完成型」に近づいてきていると思いますので、頑張つて欲しいと思います。

○椎井副委員長

ありがとうございました。それでは次に、齋藤雅博委員にお願いいたします。

○齋藤雅博委員

このシリーズは毎回楽しく見せていただいております。このシリーズは春高バレーを目指
すチームにコーチが指導する、という内容で毎回同じなのですが、なんでこんなに毎回面白
いのかな、と考えてみました。コーチの指導法がそれぞれ違いがあつて面白いということと、
選手たちが一生懸命で、その熱さみたいなものが画面から伝わってくるということが、この

番組が楽しく見られる原因なのかな、と思いました。さらにその面白さには、半年間丹念にチームを追いかけた成果もあると思います。

確か昨年は盛岡二高で、コーチは関西弁の大谷さんだったと思いますが、やはり今回の山下コーチとはキャラクターが違うし、指導法も違って、その辺は面白く感じて見ておりました。二人のコーチに共通していたのは「一生懸命やること」と「仲間を思いやること」だったと思います。高校のチームプレイで本当に大事なことは恐らくその二点なのかな、と私は見ておりました。

今回はコート上以外のコーチについての映像が、前回までの番組に比べて多かったと思いました。最後の試合の日にコーチが新潟にいて離れていた、というのもあろうかと思います。7時間もかけて新潟から通っているという話を、その車の中でしていましたが、井上さんが仰っていたように、山下コーチのバレーを愛する気持ちが番組を見た我々にも伝わってきましたし、コーチの姿をきちんと伝える、というのも非常に大事なのではないかと感じました。

「本気になること」「必死になること」をコーチはかなり仰っていましたが、こういうことをバレーを通して知った生徒というのは、恐らく今後の社会で役に立つのだろうな、と思いながら見ておりました。最近、銀行に入って来る若い行員たちは、そういう経験がないのか、実際はあるのかもしれませんが、そういう経験をした人が少ないように思います。ある種、厳しさのなかに追い込まないと、こういう言葉はなかなか出てこないもので、スポーツというのは大切だな、と改めて感じました。

選手のシンさんの足首じん帯切断は、全くの予想外だったと思うのですが、いったいどうなるのかな？とけっこうドキドキしながら見ておりました。この事件がなければ、委員の皆さんから出ていた普段の生徒の様子が見られたのではないかと私は思います。時間の限られたなかでの時間の配分ですから、どちらを選択するか？と考えた場合に、私は予想外のシンさんの事件を取り上げた方が面白いと感じました。

それから高田高校が全国優勝をしたとき、私も高校生で全く同世代だったもので、県内が非常に沸いた記憶が鮮明に思い出されました。恐らく我々の同世代は同じ思いで見ていたと思います。先ほど菅原委員がサービスと言っていましたが、過去の全国優勝の紹介は、少なくとも我々の世代にとっては、それを思い出させてくれた、ということで非常に良かったな、と思います。

最近では盛岡商業の高校サッカー全国優勝や、先日の花巻東の選抜準優勝などで、結構勇

気づけられましたので、県内のほかのスポーツのチームもぜひ頑張っていたきたいな、と思いました。願わくば、春高バレーの取材高が全国大会に進んで、そこまで取材できれば、番組の新たな展開があるのかな、というふうに思います。

○椎井副委員長

ありがとうございました。中原委員、お願いいたします。

○中原委員

私も高田高校が昭和46年に全国優勝した記憶があるので、古豪という言葉を思い出しました。それ以後さっぱりだな、という思いでいましたから、今回出てきたので、今度こそ県大会で優勝するのでは、と期待して見ておりました。そういう意味で非常に興味深く番組を見させていただきました。

当時は強くて、他の高校が、打倒高田高校ということで頑張っていたのを思い出します。

そこで高田高校を選んだ理由をお聞きしたいのと、もうひとつは、第2回春高バレーで全国優勝と紹介されていましたが、当時の正式名称も春高バレーなのか、ちょっと気になったので調べてみたら、当時の正式名称は「全国高校バレーボール選抜大会」となっていました。恐らく途中から「春季高校バレーボール・・・」というような名称に変わって春高バレーとなったのだらうと思いますが、第2回は選抜大会だったな、と覚えていたので気になりました。私は第2回大会は春高バレーではなくて、正式名称を入れて欲しかったな、と思いました。今は春高バレーでけっこうなのですがね。

そういうことで気になりながら番組を見ていたら、最後にやはり負けましたということになり、さて後始末をどうしてくれるのかな？とそれも気になって見ていました。うまくまとめて締めてくれたように思います。コーチがアルバムを作って見せてくれた、ということがありました。ただ、そのアルバムにどういう風にしてあったのか、私は目が悪いせいもあってうまく読めませんでした。多分このアルバムがいい意味で番組を締めてくれた、と思うのですが、ディレクターが気に入った部分とか、インパクトがある部分を紹介してくれるか、読めるようにしてもらいたかったと思います。そこが最後まで気になりました。

私がなぜ全国優勝の古豪の部分にこだわるか？というと、当時の監督は菊池さんという方で、未だ盛岡で健在でいらっしゃいます。その菊池さんの顔が番組で紹介されないかな？と思って見ておりましたが、やはり紹介されませんでした。私のように菊池さんを存じ上げて

いる方のために、画面の片隅でも写真を紹介して貰えれば、めんこいテレビさんの株もグッと上がろうかと思えます。

番組としては、やはりコーチが素晴らしく、インパクトのある方でした。選手の個々の顔をアップで映すことによって見ることできた彼らのその時々表情は、まさにテレビの強みを生かした結果だと思えます。さらにコーチが真剣に怒った表情をアップにして見せられると、つい画面に引き込まれてしまいますし、そこにコーチの言葉が加わると、心に迫るものがあります。団体スポーツの良さは、チームワークを通じていろいろと学ぶことができることだと思えますが、高校生の子供たちが団体スポーツを通して成長する姿を、番組を通じて見ることによって、私たちは人間育成という点について、だいぶ学ぶことができたと思えます。

同時に高校生の指導は難しいな、ということを感じましたし、監督及びコーチの役割の部分の重要性について、非常に参考になる番組だと思いました。

菅原委員が仰ったように、体育館のシーンが長く続くという部分で、私も同じように感じました。1時間この番組を見ているとやはり疲れるので、ホッとする息抜きのような場面もいくつか散りばめられていると良かったな、と思いました。

そういう意味で、強いチームは皆そうですが、お母さん方が世話をしてくれている場面がありました。もうちょっと生き抜きの場面が欲しいな、と思いました。この番組を見ると肩が凝る、ということがありましたので、もうちょっと肩が凝らないようにしていただければ、と思えます。

春高バレーコーチングキャラバンというのは、非常に関心が持てる内容ですので、番組を放送する前に、番組宣伝をしっかりとやっていただいて、より多くの人に番組を見てもらえるようにして貰えれば、なお良いと思えます。

○一戸プロデューサー

コーチングキャラバン対象高の選び方についてご説明します。ちょうど今頃の時期にあたりますが、高体連を通して、公募の形をとっております。希望する高校からは、申請書を出していただくことにしております。

申請書が届いた段階で、高体連とコーチの方と協議をして決めることとなります。

実は去年は高田高校のみの応募でした。今までは、距離的なこともあって内陸部の高校が多かったのですが、古豪ということもあり、高田高校にそのまま決まりました。高田高校の

監督は、3年前のコーチングキャラバン対象高だった盛岡市立高校の監督でありまして、内容も良くご存知だったということもありました。

有力校へのアプローチについてご質問がありましたが、応募いただいた高校のなかから選んでおります。あくまでコーチングキャラバンに参加したいという意思がなければならぬ、ということになっていますので、それをまず優先する、という形になります。

○椎井副委員長

どうもありがとうございました、では、村上委員からお願いいたします。

○村上委員

初めてのディレクターということで、いろいろと力も入っていらっしやったのではないのでしょうか、情熱が感じられたように思います。

コーチングキャラバン自体は、私も何度か拝見していますけど、今回のコーチのキャラクターというのは今まで見たなかでも、一番強烈だったように思います。10日間しかコーチング出来なかったということですがけれども、取材は10回しか出来なかった、ということですか？

○井上ディレクター

山下コーチが来るのは10日だったのですが、それ以外の日にも高校には取材に行っております。コーチがいない間は、高田高校の水沢監督が山下コーチの教えを忠実に守って指導されていたので、今回はその連携があっとうまくいったのかな、と思っています。

○村上委員

そういった事情だったのですね、なるほど分かりました。10日間しかコーチを取材出来なかった訳ですが、それだけの取材期間で、この熱血コーチの人柄が良く伝わってきたことに驚きました。

身長162センチという小柄なコーチで、しかもすごく正直なコーチですね。すごく人間味のある、厳しいだけではないコーチだと思います。たった10日で、しかも取材時間もそれほど長くはとれないなかで、よくネタを拾って、コーチの人柄や選手との絆が深まるどころまでを良く取材されたと思います。

キャプテンもエースのシンちゃんも泣きながら良くついていきましたけど、高校時代でないと流せないような涙も、ちょっと青臭いですが、ストレートに感じられました。会社で番組を見ていたのですが、ちょっとウルウルきてしまい、誰かに見られたらちょっとカッコ悪いなと思いながら見ていました。

古豪復活という説明が番組の最初に流れましたが、私は第2回大会の全国優勝という記憶がなかったので、古豪と言われても、ちょっと分かりづらかったように思います。番組の中頃で校長先生が振り返ってはいらっしゃいましたが、チームはどういう歴史があって、どういう状況にあり、どのようにして古豪復活を目指しているのか?などということをもう少し詳しく知りたかったと思います。コーチングキャラバンはドキュメンタリーということで、今のチームのことが主眼にはなるかと思いますが、学校なりチームの背景みたいなものが、あとほんの少し分かれば、番組がもうちょっと膨らんだのではないかと思います。

あと、このコーチなのですが、絶叫するは涙目になるはで、物凄い情熱を持っていることが伝わってきました。やはりこれはテレビの画面ならではのものだと思います。その反面、選手の写真を撮ったり、刺繍をしたカラー軍手を作ってあげたりだとか、ああいったお人柄というの、嫌味な感じではなくて、画面のなかでさらりと全体のお人柄を描くのに、すごくいいアクセントになっているな、と思いました。最後の試合では、携帯電話でやりとりをしていましたが、あれもドラマチックでよかったな、と思いました。むしろその場に居なくても通じ合える選手とコーチということで、そこまで来たんだな、と感ずることができて、このシーンはけっこう好きなシーンでした。コーチの本業は新潟国体のお仕事ですね。携帯電話でやりとりしながら、会場で誰か来た人に説明したりして、今のコーチの本業が垣間見えたり、それがまた番組の奥行きとなっていて、そこも印象に残ったシーンのひとつでした。

今日の委員の皆様が、普段より熱のこもった感想を述べられているような気がしたのは、番組がそうさせたのではないかな、と思います。

○椎井副委員長

ありがとうございました。それでは東海林委員からお願いいたします。

○東海林委員

高校生の就職の意識付けということで、最近専門学校の講師が呼ばれて授業をするという

ことが、実は流行っています。高校の先生方は大学を卒業されて、そのまま教職に就かれるので、普通に会社で働いた経験がありません。そこで会社の人事の担当者がどのようなことを考えているのか、社会人としてどのようにあるべきなのか、ということを経験に行ってお話をする機会が時々ありまして、私も高田高校にもお邪魔したことがあります。高校によって生徒さんの雰囲気や温度差があるのですが、高田高校はどちらかというとおおらかで、のんびりとしたところがあるという印象を持っています。これは、沿岸部の高校に割りと共通した印象でもあります。

そういうなかで今回のコーチングキャラバンなのですが、そこでなんとなくだらけてしまったかもしれない部分がある選手たちに、どうやって活を入れるか？というのが山下コーチの使命であったと思います。私の場合は分野がもちろん違うことは違いますが、与えられた2時間のなかで、「就職なんてどうでもいいや。」とか「ダメならフリーターでもいいや。」という高校生を変えさせるきっかけを、いつも模索しながら授業を行っています。そういう意味でコーチも高田高校の生徒さんたちをチェンジさせなければいけない、という気持ちで行かれる訳ですね。番組としてはコーチが生徒さんたちを変えるきっかけを取材できれば成功ということだと思うのですが、私は生徒さんたちをチェンジさせるきっかけを何か与えたいなと思い、メモを取りながら見させていただいた番組でした。

そういう意味では、何か自分の芯になるものをバレーボールで培っているんだよ、という事がありました。本当に高校生は、今何をやっていいか分からない、何にすがっていいか分からない、いろいろな高校で、そういった問題を抱えています。高校の先生も困っていると思うのです。全国優勝した盛岡商業のサッカー部の生徒たちにとってのサッカー、準優勝した花巻東の野球であったり、そして高田高校のバレーであったり、皆、芯になるものを何か掴んでいるので、あとはほんのちょっとしたきっかけがあれば、その高校生は変われると思うのです。そういったところをいかにグッと刺激してあげられるか？という部分が、この番組の中では良く出ていたと思います。ずっと山下コーチがレシーブを繋げろ、繋げるためにチームを大事にしろ。そのチームワークが、ばらばらだと絶対に優勝しないという事が、最初から最後まで番組のなかで感じる事ができたので、見ている私たちも、それでここまで来たんだ、というふうに伝わってくるものが多かったので、良かったと思います。

一戸さんが仰っていましたが、勝たなくても、別に結果が優勝ではなくても、それに至る過程が、高校生にとってはひとつのきっかけになっていくものなのだと思います。

実は私も明日の専門学校の入学式のオリエンテーションの後で何を話そうかな？と思いな

がらメモを取っていたのですが、簿記でもいいし、販売士でもいいし、とにかく乗り越える強さを、何かをきっかけにして、社会に出る前に培っていかなければならないのだよ、ということ、これからの社会を担う学生たちに伝えていきたいな、と思いました。

今までもこの春高バレーの番組を見てきたのですが、今回は先ほど八木橋委員も仰っていましたが、飽きずに1時間、ずっと力を入れて見ることができました。今回のディレクターは井上さん、とても良かったと思います。今まで違ったイメージで井上さんを見ていたのですが（笑）今回の春高バレーの番組で、井上さんのファンになりましたので、これからもよろしくお願いします。井上さん、ディレクターとしても良い番組を作ってください。

○椎井副委員長

ありがとうございました。それでは続いて久慈委員、お願い致します。

○久慈委員

春高バレーはいつも番組で見させていただいていますが、今回ほどキャラクターの立ったコーチだと、テレビもやりやすいだろうな、と思って見ていました。八木橋委員が仰ったように、コーチと選手たちの関係に注力したことが良かったのかな、と今回は思いました。

番組を見て一番思ったことは、合宿所の場面でご飯を作っていたのですが、女の子が丼飯を食べていたことでした。女の子がそんなに食べるの？と思いました。ああいうのって、凄くいいなと思います。ああいう風に日常がチラッと見えたり、試合に負けた報告をしているキャプテンの携帯に、ストラップのじゃらじゃらが付いていたりすると、化粧つけの無いバレーの選手でも、ああそういうところがやはり女子高生なんだな、と新しい発見をしたような気がして、いいなと思います。そういった意外な点とかエッセンスを散りばめると、良いのではないかとというようなことを、前回の春高バレーの番組で、お話ししたと思います。

今回はキャラの立ったコーチだったので、このような作りで良かったとは思いますが、次回のコーチが、これだけキャラが立つかどうかは？分かりませんので、次回はまたその辺を考えてやっていただければいいのかな、と思います。

コーチの唾が見えそうな感じでした。映像はとても良かったと思います。よくあれだけカメラを意識しないで喋れるな、よくあれだけ唾が飛んできそうに撮れたな、と思います。とても良かったと思いますので、次回の春高バレーも今回の良さを生かしながらかつていただければ、と思います。

私もこの間の「情熱エンジン」の収録では、カメラにビタっとつかれて大変な思いをしましたが、今回の番組もそれと一緒にあったんだろうと思いながら見ておりました。

○椎井副委員長

私は大変勉強不足で、このような制度があることを知りませんでしたし、番組を見るのも初めてでした。

この種のスポーツを切り口とした根性ものと言うのですか、ドキュメンタリー番組というのは、いつ見ても感情が高ぶります。また、自分自身が今直面している課題をどう克服していくか？というのをダブらせると、よし一丁やったろか、という気持ちになりますし、いつも元気を貰えるのがこの種の番組です。今回もそういう意味では、見ていて勇気づけられた次第です。

今回の番組の主役はコーチなのか、生徒さんなのか、分かりませんが、生徒さんの変わり様よりは、コーチである山下さんの発する言動・指導が、かなり私の印象に残りました。

特に彼女のバレーへの想い、バレーを通じた人間形成、生徒への愛情などが印象に残りました。やはりあの彼女の激しい言葉に誰も反抗することなくついていったということは、高田高校の生徒さんの純朴な心と、コーチにあたった山下さんの輝かしい経歴、それから厳しい訓練に耐えてきた自分の体験を、きちっと生徒さんにお話されたということ、生徒さんへの弱点の指摘が的を得ていたものだったからでしょう。ですから、皆、一生懸命彼女についていったということなのだろうと思います。

特に彼女の発した言葉で印象に残ったものは、「本気さ」「必死さ」でした。これは会社の中堅社員の教育などで、本当に必要なことだろうと思います。許されるならば、会社でまた皆と一緒にこの番組を見たいな、と思ったほどでした。民営化したNTT初代社長の真藤さんが管理職を相手に話している言葉が、ほぼ同じようなものでした。要は若いとき、40台くらいまでに「俺はこの仕事をやったよ。」「必死になってやったよ。」と言えるくらいのもがないと、40歳以降は会社のお荷物だよ、というふうな言葉を、真藤さんはあの強烈な個性で発したのですね。まさしくそうだろう、というふうに思います。私どもの会社も昔は半官半民というようなことを言われていたのですが、自由化になりまして、一般の会社と同じような会社になりつつあるのですが、「本気さ」「必死さ」というのがまだまだです。私の目から見ても足りないな、と思うわけで、今回の番組は、いちスポーツ、高校バレーというよりは、より高い次元で捉えてみたいと思わせる内容でした。

他にご意見のある方はいらっしゃいますか？

無ければ、欠席委員からのレポートを事務局からお願いいたします。

○事務局

吉田委員から届いております。

○吉田委員レポート

タイトルにもあったように「強い絆と心」、まさにそのことが伝わってくる内容でした。

こうしたスポーツ番組を見て思うことは、選手たち一人ひとりの真剣なまなざしと緊張感溢れるプレー、ひたむきさに心をうたれることです。

合宿や県外遠征を通して決勝まで勝ち進む経過と、メキメキと強くなっていく過程が上手に映し出されておりました。

かつて高田高校が全国制覇したことも初めて知りましたが、半年間の指導でキャプテンを中心として心が一つになるチームづくりは、職場の組織力にも共通することで、指導力がいかに大事であるか、仕事と重ね合わせて見ることもできました。

印象的だったのは勝ち負けということよりも、「心強くあれ、仲間を思いやる」という山下コーチの言葉の重みに、何かひしひしと伝わってくるものがありました。

最後に優勝できなかったことが、この番組を一層引き立てる結果になったと思います。

○椎井副委員長

ありがとうございました。では本日の番組審議会をこれで終了いたします。

○事務局

今回の審議会の模様は、4月18日（土）朝4時42分から「めんこいテレビ番審レポート」として放送いたします。次回は5月13日（水）を予定しております。本日はありがとうございました。

7. 審議機関の答申又は改善意見に対してとった措置

特になし

8. 審議機関の答申意見概要を公表した場合におけるその公表内容、方法及び年月日

*平成21年4月9日(木) 産経新聞 東北版

* 平成21年4月18日(土) 午前4時42分から4時45分まで「めんこいテレビ番組審りレポート」内で放送

* 据え置き書類を作成し、本社受付に置き一般の人々が自由に閲覧できるようにした

9. その他の参考事項

特になし